

# 四諦の理解と因中説果論

兒 玉 達 童

斷る迄もなく、佛教は苦集滅道の四諦の教である。一般凡夫の生涯を苦と見、其原因即ち集を無明に求め、苦を滅した無上の聖生涯に入らんが爲には、先づ原因たる無明を滅しなければならぬとして、之が道を修することを勧むる教である。之は醫者が病者を醫せんが爲に病因を尋ね、除くと同じで、それだけで言へば誠に平明極る教である。然るに、此平明なる教も、部派分裂以來今日に至る三國の諸論師の説く所に依ると、甚だ複雑なる教理の組織となつて、幽玄であり深遠ではあらうが、現實の苦に喘ぐ智慧淺き凡夫にとつては、近づき難き無縁のものとなつて居る。丁度高價なる良薬も貧しい病人には、高價なるが故に用ひられぬと同である。併し、複雑な教理も、根本眞理の基礎づけの爲に、諸の論難を斥くるために必要なものであらうから一概に之を難することは無論できないが、事實我々に示される諸論書の中には分析が細かとなるに従つて、反つて分析すべき所を分析せず、それが重大な誤解の因となつて佛教の全體としての理解を妨げてゐる諸例が少くないと思ふ。其一つは因中説果の濫用である。

因中説果といふのは、例へば、女人爲垢と經に説いて居る如きである。女人が垢たることは實はない。唯、其は凡夫

に對して貪著等の煩惱垢の因となるから、假に女人そのものが垢であるが如く言ふのである。又五塵を欲と名けるが、實際に五塵が即ち欲ではない。唯五塵に對して欲望を生ずるから、假にそのものが欲であるが如く言ふ。之は成實論一四に出てる諸例の中から引用したのであるが、斯る表現の仕方は經論中至る所に存して居る。三界皆苦など、いふも亦同じである。而して之を土臺としてより複雑な表現も生れて來る。例へば生死解脱は生死苦解脱で、生死苦といふ因中説果的な言葉を土臺にして理解されるのであるが、此土臺を忘れると宛かも生死そのものを解脱するかの如く解せられる如きである。之等の場合、之を斯く一々分析すれば何等難しいこともないやうであるが、併し之を濫用し、其本來の意味を見失ふことに依つて實に大きな結果が生じて來うる。

今擧げた諸例で、因と果との間に如何なる關係を見るべきであらう。因なる女人、五塵、三界、生死と果たる煩惱垢欲、苦との間に如何なる關係を考ふべきであらう。四諦の公式では苦と無明との間にも因果の關係があり、其は確かに必然的なものであるが、其と同じ關係が此處にも考へらるべきであらうか。さうではないやうに思はれる。女人は如何なる人間に對しても煩惱の原因ではなく、唯凡夫に對して然りである。悟つた人間、佛菩薩に對しては決して煩惱の因たりにえない。故に垢ではなくて清淨無垢である。それ故に、此場合の因果は、普通自然科學等といふ因果とは全く別種類のもので兩項の間に必然的關係はないのである。強いて言へば凡夫の範圍内では必然的であるとも言へるが、併し煩惱と凡夫との二概念の關係は所謂分析的で、凡夫といふは煩惱を起す者に極つてゐるのであるから、凡夫の範圍内といふことは煩惱を起す者の範圍内といふと同じであり、従つて其範圍で必然的といふことも、煩惱を起す者は必ず煩惱を

起すといふことで無意味の同語反覆である。一般に總ての人間に對して煩惱の因とはならぬ。故に因といふも何人かに對して何事かの因となれば、唯それだけの意味で因と言つて居るに過ぎない。

されば、若し、論師にして此點を誤解しない迄も明瞭に分析解説しないならば、そこから多くの、そして恐らくは極めて根本的な教理の歪曲の生れるであらうことが豫想せられる。蓋し女人が常に煩惱の因であるといふことは、凡夫と聖者の立場の相違を、よし暫くにせよ、忘失せしむることゝなるからである。而して此事は、或程度迄、因中説果の濫用によつて事實となつて居ると思ふ。之に依つて、女人爲垢となすことは容易に、女人そのものに垢といふ性質が客觀的に存して居ると、他のみならず自らをさへ考へさせるであらうからである。そして其は、元來人間論的實踐論的であり萬法唯一心の原理の下に轉迷開悟の理を説くを主眼とする主觀主義の佛教をして、人を離れ心を離れて物を論じ事を説かんとする客觀主義的理論的宇宙論的の考へ方に轉ぜしむることゝなるのである。

特に此表現法あるを注意してゐる成實論ですら、其所論中、やはり之に禍ひされてゐる、或は少くとも之に禍ひされしめさうな個所を存して居る。一體成實論は其構造が最初に發聚あつた後苦集滅道の四諦聚——成實の實は四諦のことである（三六）——に大別して説いてゐるので、其點佛教の根本形態をはつきりと保存して居り、且つ引用する經は多く小乘經である上に、論が甚だ具體的で我々の心を惹きつくるのであるが、四諦中の苦諦について「苦諦者謂三界也、欲界者從阿鼻地獄至他化自在、色界者從梵世至阿迦尼吒、無色界者四無色也」（一七）といつてゐる所などは、説一切有部等にて分つ神話的な世界分類をそのまゝとつたものであらうから、さういふ考からいへば、此等の世界は何人にと

つても苦の世界で、此客觀的性質を變ずることはできないことになる。勿論三界を出離して苦を離れることはできるけれども、三界そのものは依然として客觀的存在である。又、五受陰是苦諦として色識想受行の五を説くに方つても、例へば色について、「衣食等物、皆是苦因、非樂因也、何以知之、現見衣食過增則苦亦增、故名苦因」(七九)とか、「以有身故則有所及貪著等諸衰惱集、故知身為衆苦因緣」(七九)とかいふやうに色と苦とを因果關係に於いて述べてゐるうちはよいけれども、色そのものについて從四大生でなく從業煩惱飲食姪欲等生であるとか説くやうになると(四〇)、上述の分析不足がその弊を露してゐると考へられる。我々が我々自身の肉體や他人の容姿に愛著して心を苦しめられることは現前の事實であつて、其原因又は對象たる肉體容姿が何に從つて生じたものであるかといふ説明に依るものではない。集諦に於いて苦の因を業煩惱におくはよいが、諸業煩惱は後身の因緣として、後身を受くるが直ちに苦であるとの前提の下に六道輪廻を説き來るが如きも同一の分析不足から來るといへよう。何故に、それよりも、簡單明瞭に、業煩惱特に煩惱が一切苦の原因であると言つたゞけで濟まされぬのであらう。

成實論(一二〇)にも中論青目釋(觀因緣品)にもあるから恐らく當時佛教徒としては必ずや顧慮を拂はなくてはゐられなかつた程行はれてゐたものであらうけれど、萬物殊に此身が波羅伽提より生じたとか、自在天、大人、自然より生じたとか和合、時、世性、變化、微塵より生じたとかいふ議論にしても、龍樹は無因邪因斷常等邪見の故に、訶梨跋摩は萬物皆從業生の故に、之を斥けてゐるけれども、若し、因中說果より來る客觀主義化に誘はれなければ、問題そのものが消失しない迄も大にその性質を變じたであらう。いふ迄もなく此問題は諸法が因緣生に過ぎぬこと從つて空なる

ことを説くよい題目であるがあれ程抽象的に純理的に或は神話的にでなく、もつと現實的苦惱を中心として説かれなければならなかつたであらう。之は此等の論そのものへの言としては或は當つてゐないかも知れぬが、之を解釋する者は、少くとも無益な注意ではないであらう。一般に小乗でも大乘でも佛教が單なる理論に——ひとり依文解義のみでなく又觀想に依つて——も心が外に向いて單なる理論に墮して行つた所には、此弊が生れたのである。

今は此以上述べることはできぬが、要するに、經論の因中說果的説き方の爲に誤れることは大きいので、之を救ふためには、所謂因果の眞義を分析し直す要がある。前述のやうに女人爲垢とか三界皆苦とかいふ場合の因たる女人又は三界が垢や苦の因であるのは、決して無明煩惱が苦の因たる場合と同一義ではない。無明煩惱あつて苦受のないことはないが、女人あつても煩惱垢なく、三界は依然たれども——之をも主觀的の變化と見れば格別——苦の滅し去ることは考へえられる。いはゞ一方は主因であり、直接因であり、他方は助因であり間接因である。之に依つて苦の滅も決して此世界から脱出し、此現實の生活から逃避することではなくて、唯凡夫心を滅することにあるを知るべきである。之が佛陀の教へであつたと思ふし、又後の佛教も、今述べたやうな歪曲あるに拘らず、究極に於いては其眞意を見失はずに説き來つた所である。今日よくいふ穢土即寂光土とか凡夫即佛とか、即身是佛とかいふことも此意味で解したい。同じ世界が穢土でもあり淨土でもあるが、其は同一人に對して同時にではないのである。同一人ではあるが、所謂一人が變つたから穢土が淨土となつたのである。即身是佛ときゝ凡夫即佛ときいたからとて、誰でも即身是佛ではない。無明煩惱を滅し盡した人のみが佛である。といつて世界や人間が客觀的に變つたとはいへぬ。全く心のもち方である。

斯様に佛教の本旨をその人間本位の見方、主観主義、實踐主義に復歸せしめることに依つて、佛教の世界觀が西洋の神學的世界觀などは根本的に類型を異にすることが知られる。基督教の神の證明の中には、此世界が完全であるといふことを論據として神は存在すると證明する者が少くない。所謂辯神論が其である。例へばライプニッツの如きは、世界には種々の害惡があるけれども、其は個々に物を見た場合の話で、全體として世界を見れば、其等の害惡も皆必要なものである、例へば耶蘇の受難の如き肉體的の苦しみも人の高上に必要であり、道德的罪惡の如きも、善惡の區別を明にして人をして鈍感から救ふには必要である、故に此世界はありうべき世界中の最善のものであり、之を作つたものは全智全能至善の者でなくてはならぬから神は存在すると説く。世界には合法則性、美、諧和ありとて神の存在を説く理神論者でも同じである。此等の人々は、何れも、宗教の可能不可能を世界の構造や現象の如何に依存せしめんと、敢へて試みんとするのではないが、さういふ結果になつて居る。故に假に此考へ方で進んで世界の不幸や害惡が至善のため必要なものでないとか、世界は偶然的なもので一定の秩序なく、美も調和もないといふやうなことになるれば、信仰は崩壊するであらう。現にヴォルテールの如きは、此世は不幸と害惡との充滿する苦界であるのを見れば、神は全能ならざるか惡意をもてる者だといつて居る。

然るに佛教には本來かく、不幸や害惡を我等自身の心を離れて存する客觀的事實として見んとする考へ方は全く無いのである。若しありとすれば其客觀主義化によつて後から導入せられた異教的素質である。(昭和八年十月二十日)